

永井荷風集



永井荷風集

現代文豪名作全集

河出書房

永井荷風集

現代文豪名作全集 第九回配本

昭和二十八年七月一日 初版印刷
昭和二十八年七月五日 初版發行

定價 二八〇圓
地方定價 二九〇圓

著者

永井 壯吉

編集者

佐藤 觀次郎

發行者

河出 孝雄

印刷者

東京都青梅市根ヶ布三八五
山田 一雄



發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出 書房

電話神田(25)三一七四番

精興社印刷・高小製本

目次

目次

すみだ川	三
夏すがた	三二
腕くらべ	四八
おかめ笹	一四一
散柳窓夕榮	一三七
雨瀟瀟	一五五
花火	一七二
雪解	一七八
狐	一九二
あぢさゐ	二〇一

ひかげの花	三二
瀬東綺譚	三五
勳章	四〇九
踊子	四一六
靴	四四六
人妻	四五二
年譜	四五九
解説	佐藤観次郎

永井荷風集

すみだ川

一

俳諧師松風庵蘿月は今戸で常磐津の師匠をしてゐる實の妹をば今年是孟蘭盆にもたづねずにしまつたので毎日その事のみ氣にしてゐる。然し日盛りの暑さにはさすがに家を出かねて夕方になるのを待つ。夕方になると竹垣に朝顔のからんだ勝手口で行水をつかつた後其のまゝ真裸體で晩酌を傾けやつとの事膳を離れると、夏の黄昏も家々で焚く蚊遣の烟と共にいつか夜となり、盆栽を竝べた窓の外の往來には簾越しに下駄の音職人の鼻唄人の話聲がにぎやかに聞え出す。蘿月は女房のお瀧に注意されてすぐにも今戸へ行くつもりで格子戸を出るのであるが、其邊の涼臺から聲をかけられるがまゝ腰を下すと、一杯機嫌の話好に毎晩きまつて埒もなく話し込んでしまふのであつた。

川だみす
朝夕がいくらか涼しく樂になつたかと思ふと共に大變日が短くなつて來た。朝顔の花が日毎に小さくなり、西日が燃える焰のやうに狭い家中へ差込んで來る時分になると鳴

きしきる蟬の聲が一際耳立つて急しく聞える。八月もいつか半過ぎてしまつたのである。家の後の玉蜀黍の畠に吹き渡る風の響が夜なぞは折々雨かと誤られた。蘿月は若い時分したい放題身を持崩した道樂の名残として時候の變目といへば今だに骨の節々が痛むので、いつも人より先に秋の立つのを知るのである。秋になつたと思ふと唯わけもなく氣がせはしくなる。

蘿月は俄に狼狽へ出し、八日頃の夕月がまだ眞白く夕焼の空にかゝつてゐる頃から小梅瓦町の住居を後にテク／＼今戸をさして歩いて行つた。

堀割つたひに曳舟通から直ぐさま左へまがると、土地のものでなければ行先の分らないほど迂回した小徑が三圍稻荷の横手を巡つて土手へと通じてゐる。小徑に沿うては田圃を埋立てた空地に、新しい貸長屋がまだ空家のまゝ立竝んだ處もある。廣々とした構への外には大きな庭石を据竝べた植木屋もあれば、いかにも田舎らしい茅葺の人家のまばらに立ちつゞいてゐる處もある。それ等の家の竹垣の間からは夕月に行水をつかつてゐる女の姿の見える事もあつた。蘿月宗匠はいくら年をとつても昔の氣質は變らないので見て見ぬやうに窃と立止るが、大概はぞつとしない女房ばかりなので、落膽したやうに其のまゝ歩調を早める。そして賣地や貸家の札を見て過る度々、何ともつかず其の胸算用をしながら自分も懷手で大儲がして見たいと思ふ。然しまた田圃つたひに歩いて行く水田のところ／＼に蓮の花

の見事に咲き亂れたさまを眺め青々した稻の葉に夕風のそよぐ響をきけば、さすがは宗匠だけに、饒勘定の事よりも記憶に散在してゐる古人の句をば實に巧いものだと思返すのであつた。

土手へ上つた時には葉櫻のかげは早や小暗く水を隔てた人家には灯が見えた。吹きはらふ河風に櫻の病葉がはらはら散る。蘿月は休まず歩きつゞけた暑さにほつと息をつき、ひろげた胸をば扇子であふいだ、まだ店をしまはずにゐる休茶屋を見付けて慌忙で立寄り、「おかみさん、冷で一杯。」と腰を下した。正面に待乳山を見渡す隅田川には夕風を孕んだ帆かけ船が頻りに動いて行く。水の面の黄昏れるにつれて鷗の羽の色が際立つて白く見える。宗匠は此の景色を見ると時候はちがふけれど酒なくて何の己れが櫻かなと急に一杯傾けたくなつたのである。

休茶屋の女房が縁の厚い底の上つたコツプについて出す冷酒を、蘿月はぐいと飲干して其のまゝ竹屋の渡船に乗つた。丁度河の中途へ來た頃から舟のゆれるにつれて冷酒がおひ／＼にきて來る。葉櫻の上に輝きそめた夕月の光がいかに涼しい。滑な満潮の水は「お前どこ行く」と流行唄にもあるやうにいかにも投遣つた風に心持よく流れてゐる。宗匠は目をつぶつて獨で鼻唄をうたつた。

向河岸へつくと急に思出して近所の菓子屋を探して土産を買ひ今戸橋を渡つて眞直な道をば自分ばかりは足許のたしかなつもりで、實は大分らく／＼しながら歩いて行つた。

そこ此處に二三軒今戸焼を賣る店にわづかな特徴を見るばかり、何處の場末にもよくあるやうな低い人家つゞきの横町である。人家の軒下や路地口には話しながら涼んでゐる人の浴衣が薄暗い軒燈の光に際立つて白く見えながら、あたりは一體にひっそりして何處かで犬の吠える聲と赤兒のなく聲が聞える。天の川の澄渡つた空に繁つた木立を聳かしてゐる今戸八幡の前まで來ると、蘿月は間もなく竝んだ軒燈の間に常磐津文字豊と勘亭流で書いた妹の家の灯を認めた。家の前の往來には人が二三人も立止つて内なる稽古の淨瑠璃を聞いてゐた。

折々恐しい音して鼠の走る天井からホヤの曇つた六分心のランプがところ／＼寶丹の廣告や都新聞の新年附録の美人畫などで破れ目をかくした襖を始め、飴色に古びた簾簞、雨漏りのあとのある古びた壁など、八疊の座敷一體をいかにも薄暗く照してゐる。古ぼけた蔑戸を立てた縁側の外には小庭があるのやら無いのやら分らぬほどな闇の中に軒の風鈴が淋しく鳴り蟲が靜に鳴いてゐる。師匠のお豊は縁日ものの植木鉢を竝べ、不動尊の掛物をかけた床の間を後にしてべつたり座つた膝の上に三味線をかゝへ、櫛の撥で時々前髪のあたりをかきながら、掛簪をかけては弾くと、稽古本を廣げた桐の小机を中にして此方には三十前後の商人らしい男が中音で、「そりや何を云はしやんす、今さら兄よ

妹と云ふに云はれぬ戀中は……。」と「小稻半兵衛」の道行を語る。

蘿月は稽古のすむまで縁近くに坐つて、扇子をばちくりさせながら、まだ冷酒のすつかり醒めきらぬ處から、時々是我知らず口の中で稽古の男と一しよに唄つたが、時々目をつぶつて遠慮なく愛をした後、身體を軽く左右にゆすりながらお豐の顔をば何の氣もなく眺めた。お豐はもう四十以上であらう。薄暗い釣ランプの光が瘦せこけた小作りの身體をば猶更に老けて見せるので、ふいと此れが昔は立派な質屋の可愛らしい箱入娘だつたのかと思ふと、蘿月は悲しいとか淋しいとか然う云ふ現實の感慨を通過して、唯だ唯だ不思議な氣がしてならない。其の頃は自分も矢張若くて美しくて、女にすかれて、道樂して、とう／＼實家を七生まで勘當されてしまつたが、今になつては其の頃の事はどうしても事實ではなくて夢としか思はれない。算盤で乃公の頭をなぐつた親爺にしろ、泣いて意見をした白鼠の番頭にしろ、暖簾を分けて貰つたお豐の亭主にしろ、さう云ふ人達は怒つたり笑つたり泣いたり喜んだりして、汗をたらして飽きずによく働いてゐたものだが、一人々々皆死んでしまつた今日となつて見れば、あの人達はこの世の中に生れて來ても來なくてもつまる處は同じやうなものだつた。まだしも自分とお豐の生きてゐる間は、あの人達は兩人の記憶の中に残されてゐるものゝ、やがて自分達も死んでしまへばいよ／＼何も彼も煙になつて跡方もなく消え失

せてしまふのだ……。

「兄さん、實は二三日中に私の方からお邪魔に上らうと思つてゐたんだよ。」とお豐が突然話した。

稽古の男は小稻半兵衛をさらつた後同じやうなお妻八郎兵衛の語出しを二三度繰返して歸つて行つたのである。蘿月は尤もらしく坐り直して扇子で軽く膝を叩いた。

「實はね。」とお豐は同じ言葉を繰返して、「駒込のお寺が市區改正で取拂ひになるんだとさ。それでね、死んだお父つあんのお墓を谷中か染井か何處かへ移さなくつちやならないんだつてね、四五日前にお寺からお使が來たから、どうしたものかと、其の相談に行かうと思つてたのさ。」

「成程。」と蘿月は頷付いて、「さういふ事なら打捨つても置けまい。もう何年になるかな、親爺が死んでから……。」

首を傾げて考へたが、お豐の方は着々話を進めて染井の墓地の地代が一坪いくら、寺への心付けが何うのかうのと、それについては女の身よりも男の蘿月に萬事を引受けて取計らつて貰ひたいと云ふのであつた。

蘿月はもと小石川表町の相模屋と云ふ質屋の後取息子であつたが勘當の末若隠居の身となつた。頑固な父が世を去つてからは妹お豐を妻にした店の番頭が正直に相模屋の商賣をつゞけてゐた。處が御維新此の方時勢の變遷で次第に家運の傾いて來た折も折火事にあつて質屋はそれなり潰れてしまつた。で、風流三昧の蘿月は已むを得ず俳諧で世を渡るやうになり、お豐は其の後亭主に死別した不幸つゞき

に昔名を取つた遊藝を幸ひ常磐津の師匠で生計を立てるやうになつた。お豊には今年十八になる男の子が一人ある。零落した女親がこの世の楽しみと云ふのは全く此の一人息子長吉の出世を見やうと云ふ事ばかりで、商人はいつ失敗するか分らないと云ふ経験から、お豊は三度の飯を二度にしても、行く／＼はわが兒を大學校に入れて立派な月給取りにせねばならぬと思つて居る。

蘿月宗匠は冷えた茶を飲干しながら、「長吉はどうしました。」

するとお豊はもう得意らしく、「學校は今夏休みですがね、遊ばしといちやいけないと思つて本郷まで夜學にやります。」

「ぢや歸りは晚いね。」

「えゝ。いつでも十時過ぎますよ。電車はありますがね、随分遠路ですからね。」

「吾輩とは違つて今時の若いものは感心だね。」宗匠は言葉を切つて、「中學校だつたね、乃公は子供を持つた事がねえから當節の學校の事はちつとも分らない。大學校まで行くにやまだ餘程かゝるのかい。」

「來年卒業してから試験を受けるんでさアね。大學校へ行く前に、もう一ツ……大きな學校があるんです。」お豊は何も彼も一口に説明してやりたいと心ばかりは急つても、矢張り時勢に疎い女の事で忽ち云湊んでしまつた。

「たいした經費だらうね。」

「えゝ其ア、大抵ぢや有りませんよ。何しろ、あなた、月謝ばかりが毎月一圓、本代だつて試験の度々に二三圓ぢやきゝませんしね、其れに夏冬ともに洋服を着るんでせう、靴だつて年に二足は穿いてしまひますよ。」

お豊は調子づいて苦心の程を一倍強く見せやうためか聲に力を入れて話したが、蘿月はその時、其れ程にまで無理をするなら、何も大學校へ入れないでも、長吉にはもつと身分相應な立身の途がありさうなものだといふ氣がした。しかし口へ出して云ふほどの事でもないで、何か話題の變化をと望む矢先へ、自然に思ひ出されたのは長吉が子供の時の遊び友達でお糸と云つた前煎屋の娘の事である。蘿月は其の頃お豊の家を訪ねた時にはきまつて甥の長吉とお糸をつれては奥山や佐竹ッ原の見世物を見に行つたのだ。

「長吉が十八ぢや、あの娘はもう立派な姉さんだらう。矢張稽古に來るかい。」

「家は來ませんがね、この先の杵屋さんにや毎日通つてますよ。もう直き霞町へ出るんだつて云ひますがね……。」とお豊は何か考へるらしく語を切つた。

「霞町へ出るのか。そいつア豪儀だ。子供の時からちよいと口のきゝやうのませた、好い娘だつたよ。今夜にでも遊びに來りやアいゝに。ねえ、お豊。」と宗匠は急に元氣づいたが、お豊はボンと長煙管をはいて、

「以前とちがつて、長吉も今が勉強ざかりだしね……。」

「はい、は。間違ひでもあつちやならないと云ふのかね。尤もだよ。この道ばかりは全く油斷がならないからな。」

「ほんとさ。お前さん。」お豊は首を長く延ばして、「私の僻目かも知れないが、實はどうも長吉の様子が心配でならないのさ。」

「だから、云はない事ツちやない。」と蘿月は軽く握り拳で膝頭をたゝいた。お豊は長吉とお糸のことが唯何となしに心配でならない。と云ふのは、お糸が長唄の稽古歸りに毎朝用もないのに屹度立寄つて見る、其れをば長吉は必ず待つてゐる様子で其の時間頃には一足たつて窓の傍を去らない。其れのみならず、いつぞやお糸が病氣で十日程も寝てゐた時には、長吉は外目も可笑しい程にぼんやりして居た事などを息もつかずに語りつゝけた。

次の間の時計が九時を打出した時突然格子戸ががりりと明いた。其の明け様でお豊はすぐに長吉の歸つて來た事を知り急に話を途切し其の方に振返りながら、

「大變早いやうだね、今夜は。」

「先生が病氣で一時間早くひけたんだ。」

「小梅の伯父さんがおいでだよ。」

返事は聞えなかつたが、次の間に包を投出す音がして、直様長吉は溫順しさうな弱さうな色の白い顔を襖の間から見せた。

二

殘暑の夕日が一しきり夏の盛よりも烈しく、ひろくした河面一帯に燃え立ち、殊更に大學の艇庫の眞白なペンキ塗の板目に反映してゐたが、忽ち燈の光の消えて行くやうにあたりは全體に薄暗く灰色に變色して來て、滿ち來る夕汐の上を滑つて行く荷船の帆のみが眞白く際立つた。と見る間もなく初秋の黄昏は幕の下るやうに早く夜に變つた。流れる水がいやに眩しくくら／＼光り出して、渡船に乗つて居る人の形をくつきりと墨繪のやうに黒く染め出した。堤の上に長く横はる葉櫻の木立は此方の岸から望めば恐しいほど眞暗になり、一時は面白いやうに引きつゝいて動いてゐた荷船はいつの間にか一艘残らず上流の方に消えてしまつて、釣の歸りらしい小舟がところ／＼木の葉のやうに浮いてゐるばかり、見渡す隅田川は再びひろ／＼としたばかりか靜に淋しくなつた。遙か川上の空のはづれに夏の名残を示す雲の峰が立つてゐて細い稻妻が絶間なく閃めいては消える。

長吉は先刻から一人ぼんやりして、或時は今戸橋の欄干に凭れたり、或時は岸の石垣から渡場の棧橋へ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めて居た。今夜暗くなつて人の顔がよくは見えない時分になつたら今戸橋の上でお糸と逢ふ約束をしたからである。然し丁度日曜日に當つて夜學校を口實にも出来ない處から夕飯

を濟すが否やまだ日の落ちぬ中ふいと家を出てしまつた。一しきり渡場へ急ぐ人の往來も今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が慶養寺の高い木立を倒に映した山谷堀の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添ふ低い小家の格子戸外には裸體の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう來る時分であらうと思つて一心に橋向うを眺めた。

最初に橋を渡つて來た人影は黒い麻の僧衣を着た坊主であつた。つゞいて尻端折の股引にゴム靴をはいた請負師らしい男の通つた後、暫くしてから、編蝠傘と小包を提げた貧し氣な女房が日和下駄で色氣もなく砂を蹴立てゝ大股に歩いて行つた。もういくら待つても人通りはない。長吉は詮方なく疲れた眼を河の方に移した。河面は先刻よりも一體に明るくなり氣味悪い雲の峯は影もなく消えてゐる。長吉は其の時長命寺邊の堤の上の木立から、他分舊曆七月の満月であらう、赤味を帯びた大きな月の昇りかけて居るのを認めた。空は鏡のやうに明いのでそれを遮る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星の唯だ一つ見えるばかりで其の他は盡く餘りに明い空の光に掻き消され、横ざまに長く棚久く雲のちぎれが銀色に透過つて輝いてゐる。見る／＼中満月が木立を離れるに従ひ河岸の夜露をあびた瓦屋根や、水に濡れた棒杭、満潮に流れ寄る石垣下の藻草のちぎれ、船の横腹、竹竿などが、逸早く月の光を受けて蒼く輝き出した。忽ち長吉は自分の影が橋板の上に段々に濃く描き出

されるのを知つた。通りかゝるホーカイ節の男女が二人、「まア御覽よ。お月様。」と云つて暫く立止つた後、山谷堀の岸邊に曲るが否や當付がましく、

「書生さん橋の欄干に腰打かけて――」

と立ちつゞく小家の前で歌つたが金にならないと見たか歌ひも了らず、元の急足で吉原土手の方へ行つてしまつた。

長吉はいつも忍會の戀人が經驗するさま／＼の懸念と待ちあぐむ心のいらだちの外に、何とも知れぬ一種の悲哀を感じた。お糸と自分との行末……行末と云ふよりも今夜會つて後の明日はどうなるのであらう。お糸は今夜兼てから話のしてある渡町の藝者屋まで出掛けて相談をして來ると云ふ事で、其の道中をば二人一緒に話しながら歩かうと約束したのである。お糸がいよ／＼藝者になつてしまへば此れまでのやうに毎日逢ふ事ができなくなるのみならず、それが萬事の終りであるらしく思はれてならない。自分の知らない如何にも遠い國へと再び歸る事なく去つてしまふやうな氣がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみ／＼思つた。あらゆる記憶の數々が電光のやうに閃く。最初地方町の小學校へ行く頃は毎日のやうに喧嘩して遊んだ。やがては皆なから近所の板塀や土藏の壁に相々傘をかゝれて囃された。小梅の伯父さんにつれられて奥山の見世物を見に行つたり池の鯉に駄をやつたりした。

三社祭の折お糸は或年踊屋臺へ出て道成寺を踊つた。町

内一同で毎年汐干狩に行く船の上でもお糸はよく踊つた。學校の歸り道には毎日のやうに待乳山の境内で待合せて、人の知らない山谷の裏町から吉原田圃を歩いた……。あ、お糸は何故藝者なんぞになるんだらう。藝者なんぞになつちやいけないと引止めたい。長吉は無理にも引止めねばならぬと決心したが、すぐ其の傍から、自分はお糸に對しては到底それだけ威力のない事を思返した。果敢い絶望と諦めを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、此頃になつては長吉は殊更に日一日とお糸が遙か年上の姉であるやうな心持がしてならぬのであつた。いや最初からお糸は長吉よりも強かつた。長吉よりも遙に臆病ではなかつた。お糸長吉と相々傘にかゝれて皆ながら囃された時でもお糸はびくともしなかつた。平氣な顔で長ちゃんはあたいの旦那だよと怒鳴つた。去年初めて學校からの歸り道を待乳山で待ち合はさうと申出したのもお糸であつた。宮戸座の立見へ行かうと云つたのもお糸が先であつた。歸りの晚くなる事もお糸の方が却つて心配しなかつた。知らない道に迷つても、お糸は行ける處まで行つて御覽よ。巡查さんにきけば分るよと云つて、却つて面白さうにづん／＼歩いた……。

あたりを構はず橋板の上に吾妻下駄を鳴す響がして、小走りに突然お糸がかけ寄つた。

「おそかつたでせう。氣に入らないんだもの、母さんの結つた髪なんぞ。」と馳け出した爲めに殊更ほつれた髪を直

しながら、「をかしいでせう。」

長吉はたゞ眼を圓くしてお糸の顔を見るばかりである。

いつもと變りのない元氣のいゝはしやぎ切つた様子がこの場合寧ろ憎らしく思はれた。遠い下町に行つて藝者になつてしまふのが少しも悲しくないのかと長吉は云ひたい事も胸一ぱいになつて口には出ない。お糸は河水を照す玉のやうな月の光にも一向氣のつかない様子で、

「早く行かうよ。私お金持ちだよ、今夜は。仲店でお土産を買つて行くんだから。」とすた／＼歩きだす。

「明日、きつと歸るか。」長吉は吃るやうにして云ひ切つた。

「明日歸らなければ、明後日の朝はきつと歸つて来てよ。不斷着だの、いろんなもの持つて行かなくつちやならないから。」

待乳山の麓を聖天町の方へ出やうと細い路地をぬけた。

「何故黙つてるのよ。どうしたの。」

「明後日歸つて来てそれから又彼方へ去つてしまふんだらう。え。お糸ちゃんはどう其れなり向うの人になつちまふんだらう。もう僕とは會へないんだらう。」

「ちよい／＼遊びに歸つて来るわ。だけれど、私も一生懸命にお稽古しなくつちやならないんだもの。」

少しは聲を曇したものの其の調子は長吉の満足するほどの悲愁を帯びてはゐなかつた。長吉は暫くしてから又突然に、

「なぜ藝者なんぞになるんだ。」

「又そんな事きくの。をかしいよ。長さんは。」

お糸は已に長吉のよく知つてゐる事情をば再びぐどくしく繰返した。お糸が藝者になると云ふ事は二三年いやもつと前から長吉にも能く分つてゐた事である。其の起因は大工であつたお糸の父親がまだ生きて居た頃から母親は手内職にと針仕事をしてゐたが、その得意先の一軒で橋場の妾宅にゐる御新造がお糸の姿を見て是非娘分にして行末は立派な藝者にしたてたいと云出した事からである。御新造の實家は葭町で幅のきく藝者家であつた。然し其の頃のお糸の家はさほどにも困つても居なかつたし、第一に可愛い盛の子供を手放すのが辛かつたので、親の手元でせいゝゝ藝を仕込ます事になつた。其後父親が死んだ折には差當り頼りのない母親は橋場の御新造の世話で今の煎餅屋を出したやうな關係もあり、萬事が金錢上の義理ばかりでなくて相方の好意から自然とお糸は葭町へ行くやうに誰れが強ひるともなく決つて居たのである。百も承知してゐるこんな事情を長吉はお糸の口からきく爲めに質問したのでない。お糸がどうせ行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分の爲めに別を惜しむやうな調子を見せて貰ひたいと思つたからだ。長吉は自分とお糸の間にはいつの間にか互に疎通しない感情の相違の生じて居る事を明かに知つて、更に深い悲みを感じた。

この悲みはお糸が土産物を買ふ爲め仁王門を過ぎて仲店

へ出た時更に又堪へがたいものとなつた。夕涼に出掛ける賑かな人出の中にお糸はふいと立止つて、竝んで歩く長吉の袖を引き、「長さん、あたしも直きあんな扮装するんだねえ。網縮緬だねきつと、あの羽織……………」

長吉は云はれるまゝに見返ると、島田に結つた藝者と、其れに連立つて行くのは黒緞の紋付をきた立派な紳士であつた。あゝお糸が藝者になつたら一緒に手を引いて歩く人は矢張あゝ云ふ立派な紳士であらう。自分は何年たつたらあんな紳士になれるのか知ら、兵児帯一ツの現在の書生姿が云ふに云はれず情なく思はれると同時に、長吉は其の將來どころか現在に於ても、已に單純なお糸の友達たる資格さへないものゝやうな心持がした。

いよゝゝ御神燈のつゞいた葭町の路地口へ來た時、長吉はもう此れ以上果敢いとか悲しいとか思ふ元氣さへなくなつて、唯だぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行先知れず曲込んでゐるのを不思議さうに覗込むばかりであつた。

「あの、一、二、三……………四つ目の瓦斯燈の出てるところだよ。松葉屋と書いてあるだらう。ね。あの家よ。」とお糸は屢々橋場の御新造につれて來られたり、又はその用事で使ひに來たりして能く知つてゐる軒先の燈を指し示した。

「ぢやア僕は歸るよ。もう……………」と云ふばかりで長吉は矢張り立止つてゐる。その袖をお糸は軽く捕へて忽ち媚る

やうに寄添ひ、
「明日か明後日、家へ歸つて來た時きつと逢はうね。いゝかい。きつとよ。約束してよ。あたいの家へお出よ。よくッて。」

「あゝ。」

返事をきくと、お糸は其れですつかり安心したものの、如くすた／＼路地の溝板を吾妻下駄に踏みならし振返りもせずに行つてしまつた。其の足音が長吉の耳には急いで馳けて行くやうに聞えた、かと思ふ間もなく、ちりん／＼と格子戸の鈴の音がした。長吉は覺えず後を追つて路地内へ這入らうとしたが、同時に一番近くの格子戸が人聲と共に開いて、細長い弓張提灯を持つた男が出て來たので、何と云ふ事なく長吉は氣後れのしたばかりか、顔を見られるのが厭さに、一散に通りの方へと遠かつた。圓い月は形が太分小くなつて光が蒼く澄んで、靜に聳える裏通りの倉の屋根の上、星の多い空の眞中に高く昇つて居た。

三

川だみす
月の出が夜毎おそくなるにつれて其の光は段々冴えて來た。河風の濕ッぽさが次第に強く感じられて浴衣の肌がいやに薄寒くなつた。月はやがて人の起きて居る頃にはもう昇らなくなつた。空には朝も晝過ぎも夕方も、いつでも雲が多くなつた。雲は重り合つて絶えず動いてゐるので、時として僅かに其の間々に殊更らしく色の濃い青空の残り

を見せて置きながら、空一面に蔽ひ冠さる。すると氣候は恐ろしく蒸暑くなつて來て、自然と浸み出る脂汗が不愉快に人肌をねば／＼させるが、然し又、さう云ふ時にはきまつて、其の強弱とその方向の定まらない風が突然に吹き起つて、雨もまた降つては止み、止んではまた降りつゞく事がある。この風やこの雨には一種特別の底深い力が含まれて居て、寺の樹木や、河岸の葦の葉や、場末につゞく貧しい家の板屋根に、春や夏には決して聞かれぬ音響を傳へる。日が恐ろしく早く暮れてしまふだけ、長い夜はすぐに寂々と更け渡つて來て、夏ならば夕涼みの下駄の音に遮られてよくは聞えない八時か九時の時の鐘があたりをまるで十二時の如く靜にしてしまふ。蟋蟀の聲はいそがしい。燈火の色はいやに澄む。秋。あゝ秋だ。長吉は初めて秋といふものは成程いやなものだ。實は淋しくつて堪らないものだとしみ／＼感じた。

學校はもう昨日から始つてゐる。朝早く母親の用意して呉れる辨當箱を書物と一所に包んで家を出て見たが、二日目三日目にはつく／＼遠い神田まで歩いて行く氣力がなくなつた。今までは毎年長い夏休みの終る頃と云へば學校の教場が何となく戀しく授業の開始する日が心待に待たれるやうであつた。其のうひ／＼しい心持はもう全く消えてしまつた。つまらない。學問なんぞしたつてつまるものか。學校は己れの望むやうな幸福を與へる處ではない。……幸福とは無關係のものである事を長吉は物新しく感じた。

四日目の朝いつものやうに七時前に家を出て觀音の境内まで歩いて來たが、長吉はまるで疲れきつた旅人が路傍の石に腰をかけるやうに、本堂の横手のベンチの上に腰を下した。いつの間に掃除をしたものか朝露に濕つた小砂利の上には、投捨てた汚い紙片もなく、朝早い境内はいつもの雜沓に引かへて妙に廣く神々しく寂としてゐる。本堂の廊下には此處で夜明ししたらしい狂散な男が今だに幾人も腰をかけて居て、其の中には垢じみた單衣の三尺帶を解いて平氣で禪をしめ直してゐる奴もあつた。此頃空癖で空は低く鼠色に曇り、あたりの樹木からは蟲囀んだ青いまゝの木葉が絶え間なく落ちる。烏や鶏の啼聲鳩の羽音が爽かに力強く聞える。溢れる水に濡れた御手洗の石が跳へる率納の手拭のかげにもう何となく冷いやうに思はれた。其れにも拘らず朝參りの男女は本堂の階段を上る前に何れも手を洗ふ爲めにと立止まる。其の人々の中に長吉は偶然にも若い一人の藝者が、口には桃色のハンケチを啣へて、一重羽織の袖口を濡らすまい爲めか、眞白な手先をば腕までも見せるやうに長くさし伸ばしてゐるのを認めた。同時にすぐ隣のベンチに腰をかけてゐる書生が二人、「見ろく、ジンゲルだ。わるくないなア。」と云つてゐるのさへ耳にした。

島田に結つて弱々しく兩肩の撫で下つた小作りの姿と、口尻のしまつた圓顔、十六七の同じやうな年頃とが、長吉をして其の隣間危くベンチから飛び立たせやうとした程お

糸のことを連想せしめた。お糸は月のいいあの晩に約束した通り、其の翌々日に、其れからは長く葭町の人たるべく手荷物を取りに歸つて來たが、其の時長吉はまるで別の人のやうにお糸の姿の變つてしまつたのに驚いた。赤いメレンスの帯ばかり締めて居た娘姿が、突然たつた一日の間に、丁度今御手洗で手を洗つてゐる若い藝者その儘の姿になつてしまつたのだ。薬指にはもう指環さへ穿めてゐた。用もないのに幾度となく帯の間から鏡入れや紙入を抜き出して、白粉をつけ直したり鬢のほつれを撫で上げたりする。戸外には車を待たして置いていかにも急しい大切な用件を身に帯びてゐると云つた風で一時間もたつたかたゝない中に歸つてしまつた。其の歸りがけ長吉に残した最後の言葉は其の母親の「御師匠さんのをばさん」にもよろしく云つてくれと云ふ事であつた。まだ何時出るのか分らないから又近い中に遊びに來るわと云ふ懐しい聲も聞かれなないのではなかつたが、其れはもう今までのあどけない約束ではなくて、世馴れた人の如才ない挨拶としか長吉には聞取れなかつた。娘であつたお糸、幼馴染の戀人のお糸はこの世にはもう生きてゐないのだ。路傍に寝て居る犬を驚して勢よく駆け去つた車の後に、えも云はれず立迷つた化粧の匂ひが、いかに苦しく、いかに切なく身中にしみ渡つたであらう……………。

本堂の中にと消えた若い藝者の姿は再び階段の下に現れて仁王門の方へと、素足の指先に突掛けた吾妻下駄を内輪